

## 川口純平 大阪大学大学院 工学研究科 応用化学専攻

大阪大学

工学部 応用自然科学科卒

大学学部生活の4年間は一言で表すと「変化」という言葉で言い表すことができると思います。

まず一つ目の変化は「環境の変化」です。私は大阪大学への進学に伴い、長崎から大阪へ引っ越して一人暮らしを始めました。初めての一人暮らしでは、掃除・洗濯・食事などをすべて自分で行う必要があり、今までどれだけ恵まれた環境で生活してきたかを改めて実感しました。もちろん様々なトラブルもありましたが、その一つ一つが刺激的な経験となり、今では良い思い出となっています。また、大阪での生活そのものも大きな環境の変化でした。大阪は長崎に比べ人口が多く、多様な人々と出会えるとともに、大都会ならではの刺激を受ける毎日でした。さらに、大阪は関西の中心に位置しているため、電車で気軽に神戸や京都などへ行ける便利さもあり、多くの場所を訪れて貴重な経験を重ねることができました。その中で出会った人々との交流を通じ、異なる生活スタイルや価値観に触れ、日本国内でも地域によって生活が大きく異なることを実感しました。一方で、そうした経験を通じて改めて長崎での生活の良さを実感することも多く、自分にとっての「故郷の価値」を再確認する機会にもなりました。

二つ目の変化は「価値観や考え方の変化」です。高校時代までの私は、他県の方や異なる境遇の方と交流する機会が少なく、自分の身の回りのことしか知らない人間でした。しかし、大阪というこれまでの環境とは全く異なる土地で一人暮らしを始め、大阪大学という全国から学生が集まる場で学ぶ中で、多様な人々や価値観に触れることができました。その中で特に強く感じたのは、「誰かがしてくれるのを待つのではなく、自分から行動することの大切さ」です。大学という環境において成長できるかどうかは、良くも悪くも自分次第です。大阪大学では、勉強や部活、サークル、アルバイトなどに前向きに取り組む人もいれば、正直なところそうでない人もいました。大学生はすでに大人であり、社会の一員としての責任も持ち始める立場にあります。そのため、周囲の誰かが指示を出してくれるのを待つのではなく、自分で考え、行動し、その結果を振り返る姿勢が必要だと強く感じました。私自身、最初からそのように考えていたわけではありません。しかし、多くの人と出会い、話をし、経験を重ねていく中で、少しずつ自分の中に「主体的に動く」という意識が芽生えてきました。まだ十分に実践できているわけではありませんが、この気持ちを忘れずに、今後の生活でも意識して取り組んでいきたいと考えています。

これらの「変化」ということを強く感じることでできた要因として部活動と研究室生活の2つが大きかったと感じています。

部活動に関しては、私は大阪大学体育会ソフトボール部に所属していました。阪大ソフトボール部には監督や顧問といった大人の指導者がおらず、チーム運営はすべて学生が担っていました。入部当初は、プレー面でも運営面でも先輩方に引っ張っていただく立場でしたが、大学2年の春にキャプテンを務めることになってからは、自分たちの代が主体となってチームづくりを進めました。当然ながら、自分たちで動かなければ

ーム運営は成り立たず、協力し合いながら努力を重ねました。しかし、特にプレーの面でチームをまとめることは容易ではなく、壁にぶつかることも多くありました。そんな時に支えてくれたのが、同期や後輩、そして先輩方の存在でした。仲間が手を差し伸べ、助けてくれたおかげでキャプテンとしての役割をなんとかやり遂げることができました。先に述べた「誰かがしてくれるのを待つのではなく、自分から行動する」という学びに加え、この経験を通じて周囲と協力し合うことの大切さを実感しました。主体性と協調性、その両方をバランスよく保ちながら組織の士気を高めていくことこそが、チーム運営において重要であると強く感じました。このような環境で部活動に取り組み、組織運営やリーダーシップについて深く考える経験をしたことは、私にとって大きな変化であり、大学生活の中で最も貴重な学びの一つになったと考えています。

学部 4 年次からの研究室配属は、私にとって非常に大きな転機であったと考えています。私は化学系の研究室に所属し、配属当初は研究どころか基本的な実験操作すら理解できず、先輩や先生方に教えていただく毎日でした。しかし研究室は「研究」を行う場であり、誰かに言われたことをこなす「作業」をする場ではありません。その点、私は先輩方が取り組んでこなかったテーマを任せられ、自分で考えながら先生方とディスカッションを重ねることで、主体的に研究を進める経験を積むことができました。4 年次からこのような環境に身を置かせていただいたことで、自ら主体的に研究に取り組む姿勢の大切さを学ぶことができたと感じています。さらに、多くの学会に参加し、論文執筆にも関わらせていただいたことで、貴重な経験を重ねることができました。このように研究室に所属してから、環境も研究に対する考え方も大きく変わりました。今後も研究生生活は長く続いていくため、日々成長できるよう精進していきたいと考えています。

大学生活の 4 年間を通じて、私は環境や価値観、研究や部活動といった多くの場面で「変化」を経験しました。これらの経験を通じて、主体的に行動する力と周囲と協力して物事に取り組む姿勢を身につけることができたと感じています。今後もこの学びを忘れずに、さらなる成長を目指して努力を重ねていきたいです。